重陽(ちょうよう)**長月**(ながつき；九月)

中国の陰陽説では奇数を陽の数、偶数を陰の数と考えます。すると九が最大の陽数となり、それが重なる九月九日で「重陽」で、陽の極まるとてもおめでたい日となります。

旧暦の九月九日はいまの十月半ばで、秋たけなわ。菊の花が野山をいろどる時期にあたります。

菊が不老長寿の薬として栽培されていた中国では、この日に丘や山に登り、菊の香りを移した菊酒を飲んで長命を願う風習がありました。

この風習と菊の花が日本に伝わり、平安時代には宮中の行事となり、天皇や貴族が紫宸殿(ししんでん)に集まり詩を詠んだり、菊を愛でたり、菊酒を飲んだりして長寿を願いました。

清少納言は「枕草子」に次のように書いています。

―　九月九日は暁より雨すこし降りて、菊の露もこちたく
おほしたる綿なども、いたく濡れ、
うつくしの香ももてはやされたる。　―

これは菊の着綿(きせわた)といって、重陽の節句の前夜にまだつぼみの菊の花に真綿をかぶせて菊の香と夜露をしみこませ、宮中の女官たちがそれで体を清める習慣を詠んだものです。

江戸時代になると幕府の式目「五節供」の一つに定められ、現代の敬老の日につながっている様です。　〔村島〕

菊